

Policy Topics

核実験場とされたマーシャル諸島は今

一見えない核の脅威¹

Life Under the Legacy of the U.S. Nuclear Testing: Invisible Radioactive Menace in the Marshall Islands

竹峰 誠一郎²

Seiichiro Takemine

はじめに—見えぬグローバル・ヒバクシャ
日本は「唯一の被爆国」としばし呼ばれます。しかし核開発に伴う放射線被害者は世界で生み出され、甚大な環境汚染が地球規模で引き起こされてきました³。こうした現実を映し出すべく、「グローバル・ヒバクシャ」という言葉を私は用います。「グローバル・ヒバクシャ」の問題に今日は米核実験場とされたマーシャル諸島から迫ります。

1998年から計7回マーシャル諸島を私は訪れましたが、当初核被害は見えるものだと思っていました。「原爆の図」や『はだしのゲン』で描かれているような、目の前に強烈に迫ってくるものこそが核被害だと考えていたわけです。しかし核被害は見えない、見

えにくいものだと次第に思うようになりました。マーシャル諸島は今どうなっているのか、核実験当時のことにも触れながら「見えない核の脅威」を見つめます。

1. マーシャル諸島と核実験

マーシャル諸島は、中部太平洋に位置する29の環礁と5つの島から成る国です。1986年米国と自由連合協定を締結し独立しました。環礁というのは、小さな島々が弧を描くように並び、内側には穏やかな湖のようなラグーンが広がり、外側には太平洋の大海原が広がっています。

陸地面積は、兵庫県三田市の総面積(210平方キロ)より小さい181平方キロしかありませんが、一方で広大な海面空間が広がっています。人口はおよそ5万7千人(2006年推定値)です。

マーシャル諸島は日本との縁が深く、「デンキ」「ゾウリ」「バカヤロウ」などの日本語が使われ、「モモタロウ」という名の小売店もあります。マーシャル諸島は1914年から30年間日本の支配下にあり、住民も太平洋戦争に巻き込まれました。太平洋戦争で日本が米国に敗れると、米国が解放者としてマーシャル諸島に駐留するようになりました。

広島・長崎原爆投下からわずか6カ月後の1946年2月、核実験場建設のためマーシャル諸島軍政長官がビキニ環礁を訪れます。「全人類の幸せと世界の戦争を終わらせるため」と同軍政長官は、核実験の必要性を住民167人に説きました。

なぜビキニが核実験場選ばれたのでしょうか。「実験場所を選定することは、難題であった。……ニューメキシコの経験から、米国内で爆破はこれ以上行わないとの確固たる結論が導かれていた」と、当時の

¹ 本稿は総合政策学部主催の講演会で2009年1月7日(水)に話した要旨を筆者自身がまとめたものです。より詳しくは下記の参考文献を参照下さい。

*中原聖乃・竹峰誠一郎(2007)『マーシャル諸島ハンドブック—小さな島国の文化・歴史・政治』凱風社

*前田哲男=監修、高橋博子・竹峰誠一郎・中原聖乃=編著(2005)『隠されたヒバクシャ』凱風社

² 三重大学大学院生物資源学研究所・研究員

³ 例えば中国新聞社「ヒバクシャ」取材班(1991)『世界のヒバクシャ』講談社を参照。

米公文書に米海軍少将の発言が記されています。ニューメキシコとは、広島に先立ち1945年7月米国がニューメキシコ州アラモゴードで実施した世界初の核実験のことで、核実験は米本土内ではなく、外で行うことが決められ、「米国が自由に使用できる地域、都市や人口密集地から離れている、B-29の航続半径内に飛行場がある、気象が安定している、実験用艦艇の泊地を有する、人口が少なく移動可能である」との基準に最も合致したのが、ビキニだったと、米公文書に記録されています。

エニウェトク環礁も1947年から米核実験場にされます。1946年から58年にかけて67回の原水爆実験がマーシャル諸島で実施されました。

2. 1954年3月1日 水爆実験「ブラボー」

67回におよんだマーシャル諸島の米核実験のなかで最たる被害を与えたのは、1954年3月1日ビキニで実施された水爆実験「ブラボー」でした。第五福竜丸が被災し、「ビキニ水爆被災」あるいは「ビキニ事件」という名で記憶されている核実験です。原水爆禁止運動、あるいは映画「ゴジラ」の誕生とも深いかわりがあります。

米原子力委員会委員長は実験当日「原子力装置を爆発させた」との声明を出します。水爆実験であることさえ伏せられたのです。被害を与えたことはもちろん言及されませんでした。

しかし実際は、爆心地から東180キロにあるロンゲラップ環礁では、「太陽がもう一つ昇ってきた」かのような閃光が、空一面に広がり、島中に爆音が轟き「戦争が始まったと

ヤシの茂みに逃げていった人」もいたと住民は語ります。

数時間後から「白い粉が降り積もり、……一面雪景色」にロンゲラップはなりました。白い粉とは、放射性降下物、いわゆる「死の灰」だったわけです。しかしその粉が「死の灰」であるとの認識は当時の住民になく、なめた人や、遊んだ子もいました。無自覚のまま被曝したわけです。

ロンゲラップとその周辺にいた82人、そして爆心地から500キロ東に位置するウトリックにいた157人は、2日後と3日後にそれぞれ、クワジェリン環礁の米軍基地に収容されます。

3月11日米原子力委員会委員長は、声明で被害が出たことを初めて一部公にしました。しかし「火傷はしていない。全員元気だと伝えられている」など、被害を小さく見せる内容でした。

被害は大したことないと公言する一方、米原子力委員会は、被曝したロンゲラップとウトリック住民に関心を抱きます。「プロジェクト4・1 放射線被曝した人間に関する研究」が実施され、データの収集を米国がおこなっていたことが、90年代半ばに明らかになりました。

最近まで、放射性降下物を浴び被災したと認知されていたのは、ロンゲラップとウトリック両地域の人だけでした。しかし被災者はより広範な地域にいたことが、徐々に明らかになってきています⁴。ただ米政府はロンゲラップとウトリック以外にも被害が広がっていることを認めていません。

3. 終わりのない核被災

現在核実験場とされたビキニには、「楽園」とも思える景色が広がっています。しかし、

⁴ 例えば拙稿(2005)「塗り変えられる被災地図—隠されたヒバクシャを追う」(前田哲男=監修「隠されたヒバクシャ」凱風社、161~206頁所収)を参照。

S. Takemine, Life Under the Legacy of the U.S. Nuclear Testing

ビキニとロンゲラップの人は、今なお故郷を奪われ続けています。「核の難民」となっているのです。

ビキニの人も、ロンゲラップの人も、それぞれ移住地はあてがわれています。しかし自分の土地と切り離された生活を強いられることは、マーシャル諸島の伝統文化ではありえないことです。マーシャル諸島の土地は売り買いができず、土地は私有ではなく総有で管理されています。マーシャル人なら誰しも総有する土地を持っています。

海洋民族であるかれらは、住居を構える島だけでなく、数十もの小さな島々やラグーンなど、環礁全域に広がりをもった暮らしを営んできました。しかし移住先はたった一つの島なのです。カヌーを走らせ恵みをもたらすラグーンも、食糧採取やピクニックにでかけた小さな島々もないのです。「監獄の島」とビキニの人は移住先を呼びます。

移住地では海洋民族の足であるカヌーは廃れ、伝統的な食生活は、米農務省が配給する缶詰に取って代わられるなど、培ってきた伝統的な生活様式や文化も変容しました。

核実験は、住民の健康にも今なお影響を与えています。癌や甲状腺疾患の多発が医学的にも注目されています。例えば2004年、米国立癌研究所は核実験による癌の発生は今後も続くとの予測を出しています。また医学的には実証されていませんが、流産・死産、先天性障害をもった子が生まれたと、住民は主張します。

また放射線への不安を抱え、他の住民から「病気がうつる」などと避けられた体験、米国から「人間扱いされなかった」体験、あるいは流産・死産の体験などが心の傷となっている住民もいます。

核被害を前に住民は泣き寝入りし続けてきたわけではありません。3月1日は核被災を追悼する記念日としてマーシャル諸島共和国の公休日に指定されています。ロンゲラップの女性からは、自分たちは、「ビクティム」(犠牲者)ではなく、被害を前に立ち上がり生きぬいてきた「サバイバーズ」なのだとして自己規定する声が聞かれます。

米政府は、核実験場のビキニとエニウエトクに加え、風下地域のロンゲラップとウトリックの4地域に被害が生じたことは認めています。1986年マーシャル諸島が独立するとき1.5億ドルをマーシャル諸島政府に支払っています。

ただ米政府が認めているのは67回のうち水爆実験「ブラボー」の1回のみで、しかも「予期せぬ」被害だったとの見解です。また核実験の実施そのものは肯定し続けています。「核実験という形で、冷戦時代にマーシャル諸島民が果たしてきた自由主義世界への防衛協力に対し、心から感謝の意を表したい」と、2004年の式典で住民を前に米政府代表は演説しました。

おわりに一「見えない核の脅威」を見つめる

放射線は目に見えず匂いもしないものです。見えない放射線は、健康はもちろん、暮らしや文化さらに心にも影響を与えています。目につきやすい例えば美しい自然の破壊という枠だけで、放射線の影響はとらえきれません。

述べてきたように米国は核実験の影響を否定し、過小評価してきましたが、他地域でも核被害は伏せられる傾向があります。情報コントロールを読み解くことなくして、核被害の実相は見えてはきません。

米本土の外で、「都市や人口密集地から離

れている」などの理由で、マーシャル諸島で米核実験が実施されたわけですが、人目のつきにくい周辺で核実験をおこなうことは、他でも共通します。周辺への視座がなければ、核被害は見えません。

マーシャル諸島をはじめグローバル・ヒバクシャの実像をとらえるには、強烈に迫ってくるものだけでなく、一見しただけでは見えないものをとことん見通すことが非常に大切なのです。